

# 『理趣経』十七尊曼荼羅の成立について（試論）

川崎一洋（一洸）

## 一、十七尊曼荼羅とは

真言密教において理趣経法の本尊として用いられてきた曼荼羅に、金剛薩埵十七尊曼荼羅があります。この曼荼羅は、弘法大師空海によつて金剛界九会曼荼羅の一一部分である理趣会としてはじめて日本にもたらされました。弘仁十二年（八二二）、大師が紫綾に金銀糸で刺繡したこの理趣会曼荼羅の豪華版を製作し、ともに中国に渡つた遣唐大使・藤原葛野麻呂の追善法要を営んだことは有名です。

なお宗叡僧正が請來した理趣経十八会曼荼羅では、十七尊曼荼羅が一つの独立した曼荼羅として描かれ、「金剛薩埵理趣会」と呼ばれていますが、筆者がアジア各地を調査したところ、中央チベットのシャル寺や、ネパール領ムスタンのローモンタン弥勒堂の壁画にも、この曼荼羅が単独で描かれていることが明らかになりました。十七尊曼荼羅は、金剛薩埵を中心には、その四方に欲・触・愛・慢の四金剛菩薩、曼荼羅の四隅に華・香・灯・塗（内供養）、嬉・笑・歌・舞（外供養）の八供養女、四門に鉤・索・鎖・鈴の四門護を配した曼荼羅ですが、

そのうち八供養女の構成は、嬉・鬘・歌・舞（内供養）、香・華・灯・塗（外供養）からなる金剛界曼荼羅の八供養菩薩の構成に類似し、四門護に関しては、その像容が金剛界曼荼羅の四攝菩薩のそれと完全に一致します。

また、十七尊曼荼羅は『理趣経』の曼荼羅といわれながら、最も遅れて成立したと思われる『理趣広経』を除き、『理趣経』のいづれの類本にも言及されていません。十七尊曼荼羅が実際に説かれるのは、「金剛薩埵儀軌類」と呼ばれる、金剛薩埵の成就法を主題とする一連の儀軌群においてのみなのです。

本稿では、主に金剛界曼荼羅との関係を探りながら、十七尊曼荼羅の成立過程を追つてみたいと思います。

## 二、『理趣経』が先か？『真実撰経』が先か？

『理趣経』と金剛界曼荼羅を説く『真実撰経』の間には、多くの共通点があります。例えば両者の序分を比較すると、『理趣経』の諸類本が経の説処を他化自在天、『真実撰経』が阿迦尼吒天とすること、教主の説法を聞くために列座した眷属の数が異なること以外は、内容の大部分が一致しています。しかし、『理趣経』には一〇

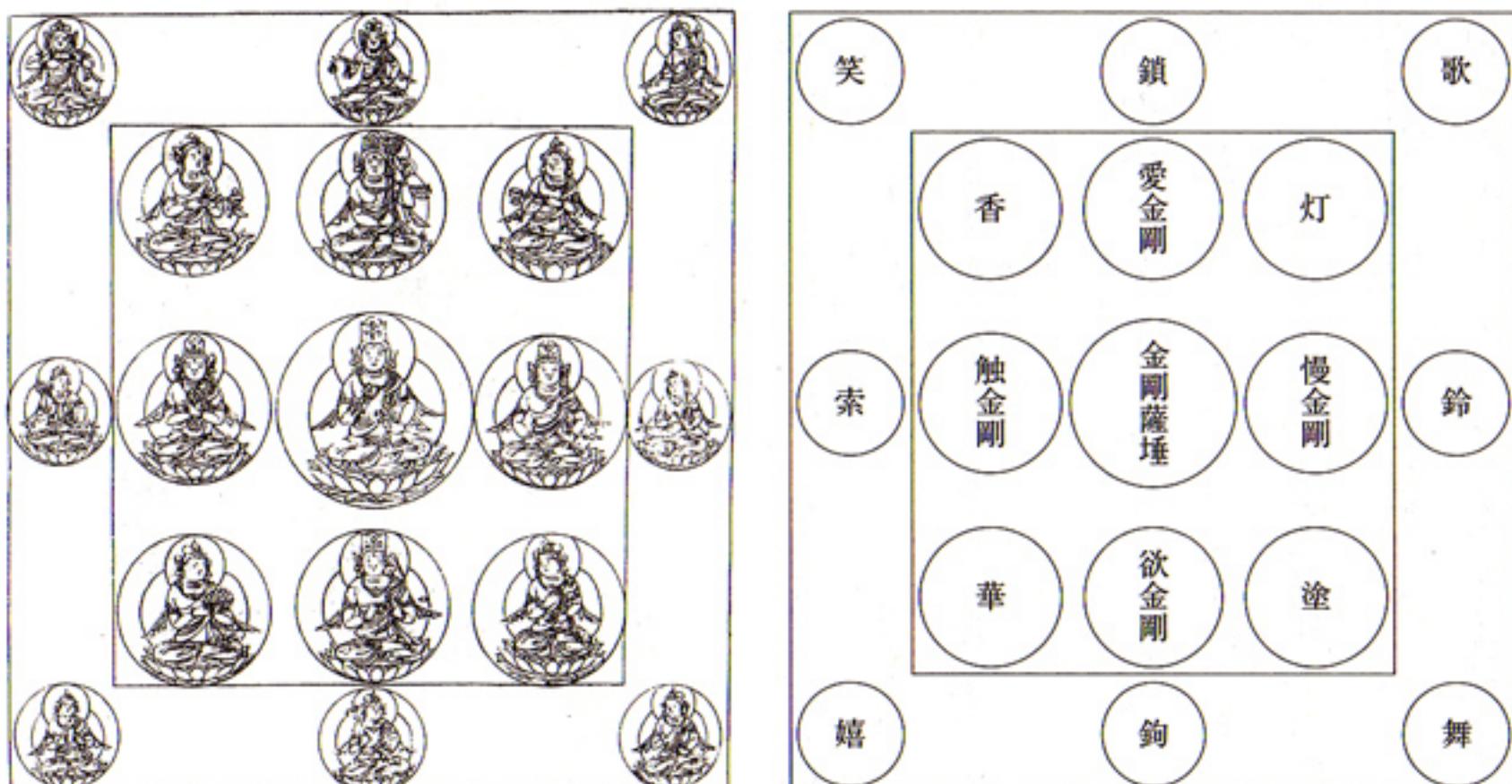


図1 十七尊曼荼羅

種にも及ぶ類本が存在するため、それらの成立順序を含め、「理趣経」と「真実撰経」のどちらが先に成立したのかについては、いまだ定説を見ていません。

なお真言密教の伝統説では、不空三藏の『十八会指帰』に、『真実撰経』が初会、『理趣経』が第六会として紹介されているため、『真実撰経』が『理趣経』より先に成立したと考えられてきましたが、最近の研究で、第六会の「大安樂不空三昧耶真実瑜伽」が、『理趣経』が『真実撰経』の成立以降、その影響を受けながらより展開した形態である『理趣広経』の前半部分に相当することが明らかになっています。

添田隆昭氏は、「理趣経」以前に存在した「原真実撰経」を想定し、その影響下に『理趣経』の最も古い形態である『大般若経』の「般若理趣分」が成立し、「原真実撰経」の一端が漢訳『不空羈索神変真言経』の金剛界四仏を説く部分に反映されているとします（「真実撰経と理趣分」『密教学研究』一一）。しかし、「不空羈索神変真言経」の金剛界四仏を説くその部分は、同経のチベット語訳や梵本には欠けており、漢訳の際に付け加えられたものであろうと推測されます。よって「原真実撰経」が存在したという証拠はなくなり、漢訳された時期を考へても、やはり「般若理趣分」のほうが『真実撰経』のいかなる形態よりも古いということになります。

いっぽう田中公明氏は、原初的な略本の『理趣経』が、曼荼羅や儀礼に関する記述を含む『理趣広経』などの広本の『理趣経』に展開する過程において、『真実撰経』が成立したとします。そして、十七尊曼荼羅は『理趣経』が説く十七清淨句を仏格化することによってできあがつた曼荼羅であり、金剛界曼荼羅はその十七尊曼荼羅の展開した形態で、金剛界の十六大菩薩は、『理趣経』に登場する金剛手（金剛薩埵）・觀自在・虛空藏・金剛拳・文殊師利・纔發心転法輪・虛空庫・摧一切魔の八大菩薩を倍の数に増廣させたものであると結論づけています（「金剛界曼荼羅の成立について（一）」『印度学仏教学研究』三一一二）。

## ※『理趣経』の類本

	經 典	清淨句	重説
略本	玄奘訳『大般若波羅蜜多経』「般若理趣分」	69	×
	菩提流志訳『実相般若波羅蜜経』(『実相般若経』)	15	×
	金剛智訳『金剛頂瑜伽理趣般若経』	13	×
	不空訳『大樂金剛不空真実三摩耶経』(『般若理趣経』)	17	○
	施護訳『徧照般若波羅蜜経』	20	×
	チベット訳『聖般若波羅蜜多の理趣百五十頌』	18	○
	サンスクリット本『百五十頌般若波羅蜜多』(中央アジアで発見)	13	×
広本	新出のサンスクリット本『百五十頌般若波羅蜜多』(チベットで発見)	20	○
	法賢訳『最上根本大樂金剛不空三昧大教王経』(『七卷理趣経』、漢訳『理趣廣経』)	16	○
	チベット訳『吉祥最勝本初と名づける大乗儀軌王』(チベット訳『理趣廣経』前半)	17	○
	チベット訳『吉祥金剛場莊嚴と名づける大タントラ』	20	×

筆者も、「般若理趣分」のような原初的な『理趣経』が次第に密教化する過程において『真実攝経』が生み出され、『理趣経』の八大菩薩が金剛界曼荼羅の十六大菩薩に展開したという田中氏の見解を支持しますが、『理趣経』の十七清淨句の仏格化によって十七尊曼荼羅が成立し、それが金剛界曼荼羅へと展開したという説には、再検討の余地があるようになります。なぜなら、『理趣経』の類本のうちで清淨句の数を一七とするのは、不空三藏訳の『般若理趣経』とチベット訳『理趣廣経』だけに限られ、さらにそれら二種の類本に、金剛界曼荼羅を説く『真実攝経』の影響が見られるからです。

ここで、われわれが毎日の勤行で読誦する『般若理趣経』の初段末尾の、重説の部分に注目してみましょう。金剛手菩薩（金剛薩埵）が金剛杵を手にしながら、『理趣経』初段の内容を吽（*hūm*）という一字の心呪にまとめて説く場面です。

時薄伽梵一切如來大乘現證三摩耶一切曼荼羅持金剛勝薩埵於三界  
中調伏無余一切義成就金剛手菩薩摩訶薩為欲三重顯明此義  
故熙怡微笑左手作金剛慢印右手抽擲本初大金剛作勇進勢

説大樂金剛不空三摩耶心吽引

これと同じ内容の重説は、「般若理趣経」と同じく清浄句の数を一七とするチベット訳「理趣広経」のほか、法賢訳『七卷理趣経』（漢訳『理趣広経』）、チベット訳『聖般若波羅蜜多の理趣百五十頌』にも含まれますが、最近、ウイーン大学の苦米地等流氏によつて、重説を含む新たな『理趣経』の類本の梵文写本がチベットで発見され、その原文が参照できるようになりました。以下に、その和訳を示すことにしましょう。

次いで、一切如来大乗現証であり、一切曼荼羅であり、普く金剛界の最上の薩埵であり、普く三界と一切三世を降伏し、無余の衆生界を調伏し得る者であり、一切義成就であり、一切金剛手、大三昧耶である世尊は、多くの金剛大秘密の薩埵たちに囲まれて、以下のように、般若理趣の義を明らかにすべく、微笑を顔に浮かべ、「右手で」本初の大金剛杵を自身の胸のところに引き上げて持ち、左手は誇らしげに遊戯しながら、この大楽金剛不空三昧耶と名づける自身の真実の心呪を宣説された。フーム。

注目すべきは、この『理趣経』初段の重説の部分に、金剛手菩薩（金剛薩埵）の偉大きさを説明する句の一つとして、「(一切如來) 大乘現証 (sarvatathāgatamahāyānābhismaya)」という語が用いられていることです。「大乘現証」の語は、『理趣経』の原初と考えられる「般若理趣分」をはじめ、重説を含まない類本の中にはまったく見出せませんが、『真実撰経』の中では重要なキーワードの一つとなっています。

金剛界大曼荼羅が説かれる『真実撰経』「金剛界品」の正式な名称は「一切如來大乘現証と名づける大儀軌王」であり、これを承けて漢訳の『真実撰経』には、不空訳三巻本で『金剛頂一切如來真実撰大乘現証大教王経』、施護訳三十巻本で『一切如來真実撰大乘現証三昧大教王経』のタイトルが与えられています。また『真実撰経』

の十六大菩薩出生段では、金剛薩埵の心呪が「一切如來大乘現証」と名づけられており、金剛薩埵を中心には描く「金剛界品」所説の一印曼荼羅も「大乘現証曼荼羅」と呼ばれています。つまり『真実撰経』では、「大乘現証」の語が、金剛薩埵の徳を表す言葉として用いられていることが理解できます。

さらに『理趣経』初段の重説には、「一切如來大乘現証」の句に続き、金剛手菩薩の性格を形容して「普く三界と一切三世を降伏する者 (sakalatraidhātukasarvatrilokavijaya)」、「無余の衆生界を調伏し得る者 (aśeṣānavāśeṣasattvadhātuvinayanasaṁartha)」、「一切義成就 (sarvārthaśiddha)」の句が現れます。これらは順に、「金剛界品」<sup>ムカム</sup>に『真実撰経』を構成する四大品のうちの、「降三世品」、「遍調伏品」、「一切義成就品」の章品名に対応しています（なお『般若理趣経』のみ、「遍調伏品」に対応する句が欠落している）。

また梵本では、『般若理趣経』で「持金剛の勝薩埵」とされる部分が、「普く金剛界の最上の薩埵 (sakalavajradhātavagryasattva)」となつており、直接「金剛界」の語が用いられています。この句は、十六大菩薩の筆頭であり、金剛界曼荼羅の諸尊を代表する尊格である金剛薩埵の性格を知った上で用いられた表現でしょう。ちなみに重説の後半に説かれる金剛手菩薩の姿も、右手に金剛杵を抽擲し、左手を金剛慢印（拳を結んで腰に安ずる印）にすると述べられ、『真実撰経』が説く金剛薩埵の像容に一致しています。

」のように、『理趣経』初段の重説は、「大乘現証」をはじめとする『真実撰経』の四大品の名称を含み、また「金剛界」の語を挙げる類本も存在することから、『真実撰経』の影響を受けて記述されたものであることがわかります。よって、重説を伴う『理趣経』の諸本は、その成立を『真実撰経』以降に位置づけることができるのです。

### 三、四印曼荼羅・一印曼荼羅から十七尊曼荼羅へ

清浄句の数を一七とする『般若理趣經』とチベット訳『理趣廣經』の二種の類本は、右記で考察したような重説を含むことから、金剛界曼荼羅を説く『真実攝經』以後の成立であると考えられます。そうなると、田中氏の「十七清浄句の仏格化によつて十七尊曼荼羅が成立し、それが金剛界曼荼羅成立の前提になつた」という説には、無理が生じることになります。

そこで筆者は、『真実攝經』に金剛界大曼荼羅の省略形として説かれる、四印曼荼羅（九会曼荼羅の四印会）と一印曼荼羅（九会曼荼羅の一印会）を原型として十七尊曼荼羅が成立したのではないかと考えました。なぜなら、四印、一印の両曼荼羅を、中尊、四親近、八供養菩薩、四攝菩薩からなる十七尊構成に建立する伝統が存在するからです。

図2は敦煌から出土した白描の四印曼荼羅ですが、この曼荼羅では禪定印を結ぶ大日如来を中心として四方に菩薩形の四仏を配し、さらに八供養菩薩と忿怒形の四攝菩薩を描いています。また、ラダックのアルチ寺三層堂には、金剛界の五仏をそれぞれ中尊とし、その周囲に四親近、八供養菩薩、四攝菩薩を配した五種の四印曼荼羅が描かれています。

さらに台密の安然が著した『金剛界大法対受記』には、「四大印とは四印曼荼羅なり。言く、仮に若し東方の一仏を取らしめば、中台に四菩薩、四攝、八供を安ず。凡そ十七尊、是れを四印曼荼羅と名づくるなり。復た三方に於いても是の如し。」とあり、唐土においても十七尊構成の四印曼荼羅が行わっていたことが窺えます。

次に、一印曼荼羅を十七尊構成に建立することについては、不空三藏の『十八会指帰』に「第六に一印曼荼羅

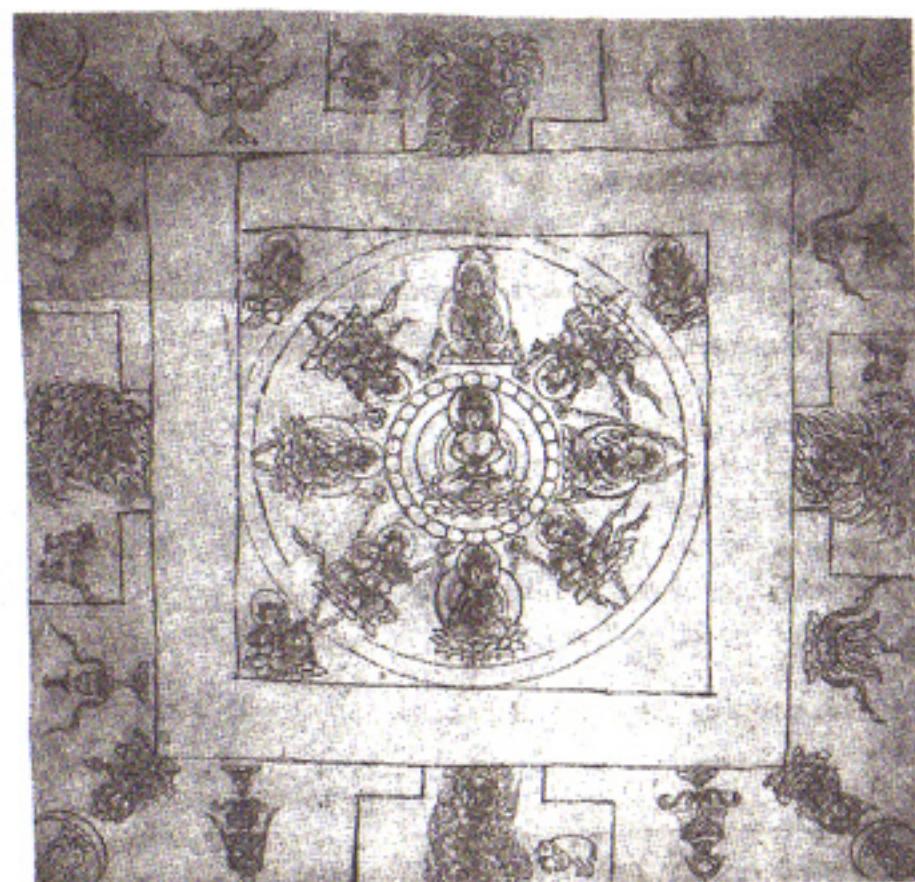


図2 敦煌出土の四印曼荼羅

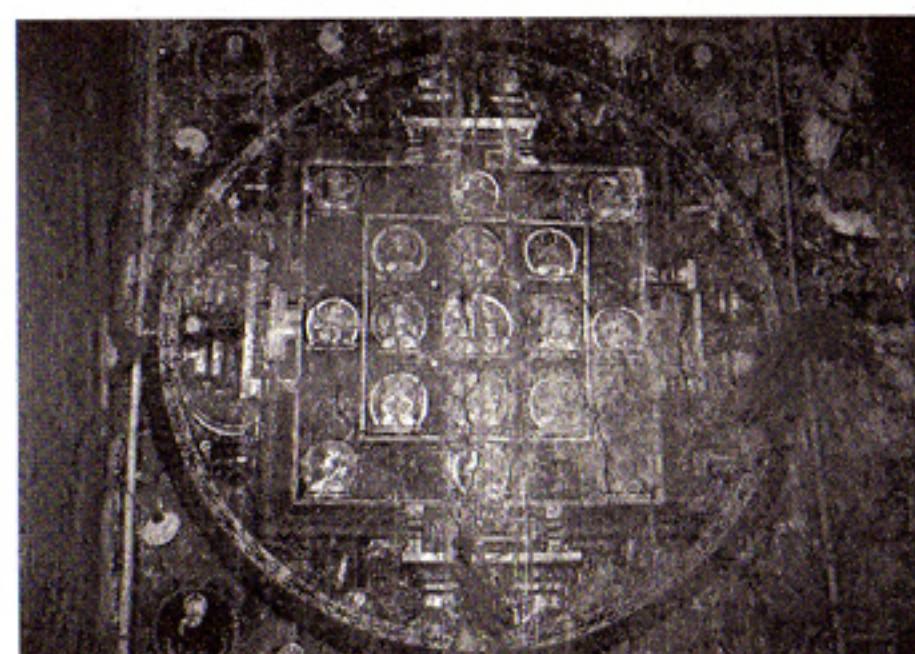


図3 マンギュ寺弥勒堂の金剛薩埵曼荼羅

を説く。若し毘盧遮那の真言及び金剛薩埵菩薩を持すれば、十七尊を具す。」と説かれています。ラダックのマンギュ寺弥勒堂に描かれた金剛薩埵を中尊とし、四親近、八供養菩薩、四攝菩薩を配する曼荼羅（図3）は、このような十七尊構成の一印曼荼羅であろうと考えられます。

茶羅の一印会では、中央の月輪中に大日如来一尊が描かれますが、『眞実撰経』の本文では、一印曼荼羅には金剛薩埵を描くように指示されており、実際に中央チベットのシャル寺の壁画や善無畏三藏が伝えた『五部心観』の中には、金剛薩埵一尊を描いた一印曼荼羅が遺されています。なお『眞実撰経』の一印曼荼羅を説く箇所には、「離貪のごとき罪は三界においてほかにない。それゆえ、あなたは愛欲を離れてはならない。」と、『理趣経』と共に通する煩惱即菩提の思想が述べられおり、金剛薩埵が『眞実撰経』において、すでにこのような思想と深く結び付いた尊格であったことがわかります。

筆者は、このような四印曼荼羅や一印曼荼羅を参考にして、『理趣経』の思想も取り入れながら、大樂普賢金剛薩埵を中尊とする十七尊曼荼羅が考案され、同時に、十七尊曼荼羅の作壇と入壇の作法を説く「金剛薩埵儀軌

類」が編まれたものと推測しています。

そして十七尊曼荼羅の影響下に、その尊数に合わせて『理趣経』の清浄句の数が一七に整理されたものと思われます。そのため「十七清浄句」では、「般若理趣分」や菩提流志訳『実相般若経』で本来一具であった「心安楽・語安楽・身安楽」のうちの身安楽の清浄句のみが切り離されて採用されたり、「色・声・香・味・触」の五境の清浄句のうちの、触の清浄句が割愛されるなどの不自然が生じているのです。

#### 四、十七尊曼荼羅の成立過程

それでは、金剛界曼荼羅の省略形として描かれた十七尊形式の曼荼羅が、どのように十七尊曼荼羅に展開したのか、その過程を追つてみましょう。

まず曼荼羅中央のいわゆる五秘密尊について、金剛薩埵が『眞実撰経』、特にそこに説かれる一印曼荼羅と深いつながりを有することはすでに述べましたが、欲・触・愛・慢の四金剛菩薩に関しては、その出自を明確に示す資料は現在のところ与えられていません。しかし梅尾祥雲博士がその大著『理趣経の研究』で指摘されたように、『理趣広経』後半の五秘密曼荼羅を説く部分には四金剛菩薩の秘密の尊号が説かれており、それらが『理趣経』第十七段（深秘の法門）における五種秘密成就のうちの大欲（欲）、大樂（触）、一切如来摧大力魔（愛）、三界主自在（慢）の諸句に一致することから、四金剛菩薩がこれらの句を仏格化した尊格であるとも考えられます。なお四金剛菩薩の図像化には、金剛界曼荼羅において金剛薩埵と関係のある諸尊の像容が参照されたものと思われ、欲金剛菩薩の弓矢を持つ姿は、金剛薩埵とともに阿閦如来の四親近を構成する金剛愛菩薩の像容に、両手を拳にして左右の腰に置き（金剛慢印）、頭を少し左に傾ける慢金剛菩薩の姿は、『眞実撰経』において「金剛

薩埵の妃」と説かれる金剛嬉菩薩の像容に一致しています。

次に、曼荼羅四隅の八供養女を金剛界曼荼羅の八供養菩薩と比較すると、①内外の四供養が入れ替わる、②香・華・灯・塗が華・香・灯・塗の順になる、③鬱菩薩が笑菩薩に交替する、という三つの相違点が見られます。それでは、なぜこのような変更が行われたのでしょうか。

まず、①の理由について、『真実撰経』では、香・華・灯・塗の四供養は四仏によつて供養された大日如来の妻妾、いっぽう嬉・鬘・歌・舞の四供養は、金剛薩埵、金剛宝、金剛法、金剛業の四転輪王菩薩の妃と考えられているため、大日如来に替わつて金剛薩埵が中尊となつた十七尊曼荼羅では、内外の供養女が入れ替えられたのではないかと思われます。

続いて②の理由について、十七尊曼荼羅を説く「金剛薩埵儀軌類」の中でも『普賢瑜伽』からの略出であるとされる『一切時方成就軌』と『普賢軌』では、華・香・灯・塗の四供養が春・雲(夏)・秋・冬の四季の名で呼ばれています。これら四尊は金剛薩埵の四季恒久の大樂を表すとされますが、四尊の持物には金剛界曼荼羅の香・華・灯・塗のものがそのまま踏襲されています。そこで、四季の供養菩薩とした場合、花の咲く春の菩薩の持物には「華」がふさわしく、雲(夏)菩薩の持物には香煙をたなびかせる「焼香」がふさわしいため、香菩薩と華菩薩の順番に入れ替えられ、その結果、華・香・灯・塗の順となつたのではないでしょうか。なおこれと同趣旨の四季の供養菩薩の持物の解釈は、不空三藏の『十七聖曼荼羅義述』にも述べられています。

③については、現時点での理由を示す資料は見つかっていませんが、十七尊曼荼羅を説く儀軌の中には五秘密尊のうちの慢金剛菩薩が華鬘を持つと規定するものもあるため、持物の重複を避けて、同様に華鬘を持つ鬱菩薩をやめ、金剛界曼荼羅において鬘菩薩と同じく宝部に属する金剛笑菩薩を女尊化し、新たに供養女として加え

たとも考えられます。

最後に、四門護の鉤・索・鎖・鈴の四菩薩が金剛界曼荼羅の四攝菩薩であることは論を待ちません。ただし、一部の儀軌ではこれらの四菩薩が色・声・香・味の名で呼ばれることがあります、このように呼ばれるようになつたのは、十七尊曼荼羅の影響によつて『理趣経』の清淨句が一七に整えられ、門護の四菩薩に色、声、香、味の清淨句が配当され、会通が図られてから以降のことといえるでしょう。

※本稿は、福田亮成博士古希記念論文集『密教理趣の宇宙』（『智山学報』第五十六輯）に「『理趣経』十七尊曼荼羅の成立に関する試論」と題して寄せた筆者の論考に新たに判明した事実を加えながら、一般読者向けに書き改めたものです。

本稿の作成に際しては、苦米地等流氏のご好意により、新出の『理趣経』梵本のテキストを参照することができました。記して感謝申し上げます。なお、当『理趣経』梵本の校訂テキストは、近く氏によつて刊行される予定です。